

〈特集〉 東南アジア大陸部における民族間関係と 「地域」の生成

序 文

林 行 夫*

I 課題としての民族間関係における「民族」と「地域」

13篇の論考を納めた本特集号は、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」A02「地域性の形成論理」の一公募研究「東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成」での成果報告書〔林 1996〕を継承・拡充する意図をもって編まれた。ほとんどが80年代から90年代にかけて特定地域での一年以上にわたる長期の定着ないし広域調査によってえられた資料に基づく論考である。

対象地域は、タイ国を中心に中国雲南省、貴州省、ビルマ（ミャンマー）、ラオスにまたがる。扱われている「民族」は、タイ系諸族（シャン、ラオ、タイ・ルー、トン）、およびミエン（ヤオ）、リス、カレン、アカである。タイ系諸族はタイ系の言語を話す人びとの総称である。現在のタイ王国のみならず、西南中国、ラオス、ベトナム北部、ビルマ、アッサムに広く居住する。東南アジア大陸部の過去と現在を考察する際に、クメール、ビルマ、ヴィエト族とともに欠かすことのできない人びとである。ただし本号で扱われているタイ系諸族の多くは、かつて仏教政体に特徴づけられる王国をなしたが、後の植民地化、国民国家形成の過程で周縁化されてきた人びとである。後者は、過去半世紀近くのあいだに「山岳民」ないし「少数民族」として国家が認知するようになった人びとである。いずれも今日制定されている国境を跨いで分布し、歴史的な国民編制のなかで分断、周縁化されてきた経緯をもつ点で共通する。

それぞれに展開されている主題は、国境からみた国家と民族、地域間開発と自文化の生成、移住とネットワーク、民族の記憶、アイデンティティの変容、ジェンダーと多岐にわたっている。しかし、総じて、タイ系諸族とその隣人である非タイ系の人びとを中心とする民族間、国家間、地域間関係の今日の複合的な諸相と動態を、国民国家が整備されてゆく過程で周縁化される境界領域の「現実」から伝えようとする点で一致している。

* 京都大学東南アジア研究センター

II 民族間関係のなかの「民族」

東南アジア大陸部は、民族の十字路、民族のるつぽと形容されてきた地域である。アフリカなどととともに、わが国の民族学や地域研究の主要な出発点のひとつとなった場所である。そこでは個々の民族文化の多様性ととともに、民族集団そのものの生成変容過程について、数多くの知見が展開されてきた。

関係論的アプローチをはじめとする「民族」動態論もそのひとつである。今日風にいえば、民族をバイオロジカルな「人種」と捉えずに、二者関係を越えて流通する「民族」とは、優位な多数派のまなごしのなかで対象化され、その権力作用によって制度化されるというものである。個々の民族社会は、常に隣接する異民族・異文化、有力支配民族による政体や国家編制過程との歴史的・政治的・文化的諸関係のなかで存在する。それは、それぞれの言語集団が担う自然、社会、文化的資源を含む生態環境とも連動し、自他を差異化する指標としての「民族」と具体的な民族間関係はそのラベルとしての名称も含め、人びとのアイデンティティ形成に大きな影響をおよぼす。主観的な帰属意識もまた、外部からの政治行政や市場経済の空間において、優位な他者との相互依存関係において変化する。同様に、他者のまなごしを利用するかたちでも展開する。東南アジア大陸部の先住民（とりわけ男性）の多くが複数言語使用者であるように、民族の形成、衰亡は閉じられた社会系のなかで展開されてはいない。民族は文化、歴史的時間のなかで何らかの持続性を示す実在というものではなく、むしろそうしたさまざまなレベルの関係のなかでうみだされ、位階づけられ、変化してきた表象である。よって、ある民族社会はそうした優位な多数派、諸資源を供給する環境との関係のなかで捉えられなくてはならない。

民族のこうした生成文法は1950年代から今日まで繰り返し論じられてきた [Leach 1954 ; Moerman 1965 ; 1968 ; Kunstadter 1967 ; Barth 1969 ; 岩田 1966a ; 1966b ; 1971 ; 飯島 1971 ; 大林 1984:7-8]。60年代ではそれを部族社会から国家へといたる発展段階論に適用する議論が顕著であった。しかし、80年代に入るまでもなお追認されてきた主題は、とりわけ国境を越える「少数民族」の比較研究においてであるが、社会文化変容過程と連動する民族アイデンティティの可変性、民族境界のフレキシビリティや相対性に関するものであった [Keyes 1979]。民族の境界やエスニシティというものは、文脈や状況により異って現れる現象であり、関係のなかで生じる表象であるという見識は、近年の人類学的研究においては自明のものとさえなっている [cf. 内堀 1989]。

ところが、今日民族が自立した存在のようにして記述される傾向は、一般には減少するどころか逆に強まってさえいる。実体論と現象論の狭間を揺れ動くというより、異文化や紛争といった問題状況を略述する通俗的なインデックスとして、民族を実体化する見方が一層卓越してい

る状況にも留意しなければならない。

「民族」をめぐる通俗的解釈の根は個別的で深い。例えば、冷戦体制が東南アジア大陸部をおおっていた時代にわが国で流通した「民族」は、「インドシナ地域」をまとめあげるかにみえた民族解放運動とセットになっていた。それらの運動でもちだされた民族は、当該地域の諸民族社会の実情とは異なるレベル、すなわち連帯のための戦略にうらうちされた、反帝国主義イデオロギーとして想像されかつ実体化されようとした「民族」であった。また、同地域における民族の複合状況を捉える視座として、「対立」か「共存」かのどちらか一方に偏向する議論も、同様に「民族」を実体視させる土壌を醸成してきたといえるだろう。わが国では政治学や国際関係論の論者がもっぱら前者をとりあげ、日本文化の源流を求める民族学、文化人類学者が後者を強調してきた観があるが、いずれも「民族」を実体視する立場からの評価的解釈が透視できることに変わりはない。日本人研究者による戦後東南アジア大陸部にかんする「民族」の記述をめぐる問題については、今後さらに詳細な検討を必要とすることは論をまたないが、同地域にふるさとの「幻想」を求め描くことによって、出会った民族はその断片を体現する標本のような存在として表象されることにもなった。探検調査を通じて永遠の日本人探しをしていたということになるのであるが、このように、奇妙なことに「民族」はその当該の人びとがくらしを営む場を離れて語れば語るほどに、実体論的に捉えられる傾向が強くなり、さらには制度化されてゆく。

さらに、今日の識者やメディアが、自己が帰属する（と了解する）文化とは異質にみえる文化の「多様性」をエキゾチシズムに身をおく傍観者として紹介してきたことも無関係ではない。ある「民族」についての語りや、個々の「民族」についての情報が増すほどに、それは複雑で奇怪な社会事象を観察者にとって読み込み可能にするための有用な範疇として、ほとんど「人種」と等価の「民族」という運用法がメディアや識字者に浸透する。さまざまな地域の情報をもたらされるほどに、このラベルはしこりのように固まって標本化する。このような「民族」をめぐる常識論的見方は、逆説的にも「民族」そのものをステレオタイプ化し、傍観者側の社会で了解可能なものとして紹介、記述してきた人類学者や事情通の〈貢献〉によるものが大きい。本特集号の表題に「民族間関係」を含めているのは、語られ描かれる民族は常に特定の地域での具体的な相互関係における現象（関数）であるという基本的事実を想起することで、構築されている社会や文化の制度編制様式（および同時発生する非制度的領域のありかた）についての議論を物象化してしまうことを回避するための警句のような意味をもこめている。同時に、ある地域の人びとの社会関係について研究する者がそれを第三者（読み手）を前提に記述するときに必ず遭遇する、前述したような逆説を問題化しようとする意志の表明でもある。

Ⅲ 語りはじめた「民族」

ところで、60年代末から80年代初頭にかけて、東南アジア大陸部の民族誌的調査研究は、タイ一国を除き広範囲に実施されることは事実上不可能であった。民族、社会・文化の研究は主にタイ国を舞台になされ、東南アジア大陸部の民族誌的研究には大きな空白が生じるようになった。しかし、80年代半ば以降、それまで定着調査が許されなかった地域において、制限つきであるにせよさまざまな分野での経験的研究が実施できるようになった。この間に遂行された調査研究のなかで共有されてきた認識のひとつは、個別の村落、民族、地域社会を捉えるためには、観察者側の恣意的に切りとられた範囲に完結することなく、個々の語りや表象を、国家間、民族間との関係のなかで分析・検討しなければならないというものである。とりわけ、その国で辺境とみなされるような周縁化された国境地域の民族集団を調査してきた者には、前述した50年代のリーチ以来の分析視点が、その境界のフィールドにおいて強く意識されてきた[cf. Keyes 1987; Wijeyewardene 1990]。

他方で、西南中国、タイ、ラオス、ベトナムをふくむメコン川流域観光開発計画などにみられるように、東南アジア大陸部は新たな国家間・地域間統合への時代に入った。とりわけ積極的な地域間連携を進める西南中国は、今日の大陸部東南アジアを考える際に、もはや無視できない地域としてあらわれている。そうした動きと連動して、当該国の内なる異民族社会の研究も個々の文脈で急速に進められてきている。それらのいくつかは、個々の国家の民族政策とも密接に絡んでいる。さらには、隣接国家間の文化外交の手段として促進されてもいる。まなざされる「民族」についての新たな言説が、学術研究として、あるいは国家政策の一環として蓄積・流通するようになった。植民地の時代以降近年まで、観察され記述されるばかりであった側の文化とその担い手たちが、逆にまなざす側の視線を据えながら、自己を演出・創造する傾向が顕在化することにより、また、それらがメディアを通して発信されることによって、東南アジアないしあらゆる「地域」を強制的に規定する要因は、さらにこの種の視界の相互性によってたつエスノ・ポリティックス、リージョナル・ポリティックスへと展開されてきている。

すなわち、東南アジア大陸部の民族誌的研究をとりまく世紀末の環境は、西南中国をも含む空間的広がりをもつとともに、観察者と被観察者の関係のなかで、円環的かつ重層的な構造をとりながら、異国の訪問者たる研究者を包みこんでいる。また、今日の市場経済体制のもとで「民族」は国家の観光資源のひとつとなるとともに、国家の伝統を表示するものとしても運用されている。つまり、「民族」がすぐれて自己の政治的手段であるとともに、それが内外の権力作用によって創出される現象であることを明瞭に示すようになっているのである。このような認識は、グローバルな社会変化およびそれと相反するかのような民族や地域社会の際だった特徴が顕在化する今日こそ、ますます実感を伴ったものとなってきている。

研究者と研究対象との関係もまた大きく変わりつつある。人類学的調査の主な研究対象であった「民族」の出自をもつ研究者は、彼が帰属する、あるいは彼を包摂する環境に応じて、それぞれの戦略にもとづいて自民族文化および隣接する異文化について語り始めた。多くが「先進国」の出身者である調査者が従来特定地域に沈潜しつつも、恣意的なレファレンスとしてきた「民族」という概念は、ここで一層硬直化したものとしてあらわれる。さらに、こうした動きは民族や地域についての画一的な従来の認識が、大国と小国、支配民族や少数民族、記述する側とされる側との関係において生じた表象の力学によるものであったことも教える。ある民族の名称や文化を、バイオロジカルで固有のものとして引き合いにだすのは、今日では研究者のみならず、起業家精神に富む政治家であり、外交官であり、郷土を有名にしたい地方出身の官僚であり、知識人の仲間入りをした好事家、さらには人生の若い時期に町へでて他の多くの村人よりも高い教育を受けた村の知的リーダーたちに及んでいる。当然のことながら、その表出形態と過程は一樣ではない。引用される典拠も喧伝の文体も、それぞれに異なる。だが、それがどのようなものとして今日まで継承されてきたのかという「過去」については忘却をきめこむように永遠のものとし、それを「今・ここで」利用するという点は共通する。90年代以降、頻繁に開催されるようになった国境をはさんでの学術交流や各種のセミナーは、一面で研究の方向を先進諸国からの外部者による同地域の研究主導という枠を解体する契機を秘めながら、一層活発化している。この種の研究は、その正当性を新旧の欧米の著名な研究者や関連施設の権威に求めるといった植民地的構造を基本的に踏襲しつつも、必ずしも外部者主導によらない方向性を確実にもち始めている。そして、このような文化事業が、他方では当事者が相互に利益を享受するための「外交」の一環として位置づけられ始めていることも事実である。

IV 本特集号の構え

本特集号が生まれることになった背景について述べておきたい。前述の研究班は、高谷紀夫（広島大学総合科学部助教授／平成7年度研究者代表）、林行夫（京都大学東南アジア研究センター助教授／平成8年度研究者代表）および長谷川清（岐阜教育大学外国語学部助教授）の3名が構成し、東南アジア大陸部のビルマ、タイ、ラオス、西南中国を対象地域とし、国境を接した複数の国家にまたがるシャン、ラオ、タイ・ヌー、タイ・ルーを研究対象として扱い、上述のような認識をもって、一国研究を越えた国家と民族、地域の生成と動態の複眼的な記述およびその視座の検討を企図していた。タイ系諸族が中心であったが、同様の状況にある他の民族についても、内外からの研究協力者による発表報告を組み込むことで、広く東南アジア大陸部の民族と地域の現状を捉えようと試みた（付表参照）。

この研究班は、さまざまな問題群を析出整理するために、相互に関連するいくつかの課題、

ないし論点を設定していた（詳細は〔林 1996〕参照）。もっとも基本的な合意は、ある民族社会を考察するには人びとが帰属する、あるいは包摂される地域の歴史的な文脈を前提とするという方針であり、かつ実地の調査研究で得られた資料を出発点にして考えるという姿勢である。そして、対象地域や国家における政治・経済的、社会・文化的背景についてとくに80年代以降の個々の民族集団をめぐる状況や文脈の構造的変化についての具体的な検討をはかることがあげられていた。そこには、民族集団をめぐる外部環境——国際関係・地域秩序の再編、「国境」のボーダレス化と地域経済圏の活性化、国家による開発政策の推進など——と民族間に作用する政治力学の変化、民族間の経済格差、資源をめぐる競合・対立関係等が考慮されていた。さらに、それらは「民族」の構築に関する理論的問題の検討へと深化される予定であったが、「山地民と平地民」「棲み分け・共生」「開放系と閉鎖系」など、主に人類学者がうみだした古典的なモデルや理論の再検討が十分に行われたとは言い難いこともここで指摘しておく必要がある〔cf. Russell 1989〕。また、フィールドワークと民族誌的記述をめぐる諸問題について、今日、急速に変貌しつつある対象民族社会と研究者の関わりにおいて、記述する側が恣意的に運用してきた「民族」像、およびフィールドワークの限界と可能性、さらには国境を越えて広がる民族集団にたいする動態的な民族誌の記述の方向と実践についての検討も、今後の課題として残された。

本特集号に納められた論考は、たとえば民族の共存や対立という主題を、それ自体において扱おうとはしない。むしろ、ある歴史をもつ地域で、それぞれの社会状況において個々の日常生活を営む人びとの、地域認識の重層性、それに関連する「民族」状況の動態が具体的に明らかにされている。地域や民族をシステムとして包摂する国家と国家間の関係を焦点に、国家が制定する国境という人工物をめぐって、民族の自己意識と地域の多元的現実に関連する問題が提出される一方、国境をめぐって当該の住民が対応・対抗しつつうみだす「同一民族」の「異質な現実」の様相が分析されている。また、国境を越え、あるいは集落をでて都市に住み、それぞれ新たな隣人とともにくらしの方途を築こうとする人びととそのネットワークのなかに、ラベルとしての「民族」の生成と消滅の過程が描かれる。さらに、民族のラベル、言語の再生産に関わるのは男性よりも女性であるというジェンダー論的観点から、「民族」を担う女性の行動が明らかにされている。

全体として、ミクロな社会での豊富な事例を提供することに終始しているようにみえるかもしれないが、それらをつないでいるのは、個々の事例のよってたつ「場」をたちあげている諸力の属性を、歴史的、政治的、文化的に明らかにしようとする民族誌・社会誌の方向性である。また、東南アジア大陸部において国民国家を構築する側の論理が実際の政治力として地域や民族をつくりあげて行く側面と同時に、そこから外れて制度化から取り残される領域、ないし国家が包摂するように見えながらそれを回避しつつ、生成維持されるくらしの現実、あるいは脱

制度化、脱国家化しようとする個々の生活世界の生成と動態への着眼である。冷戦体制が国家間関係の上では消滅し、「国民国家」が突出して語られることが顕在化している現在こそ、このような現実の局面は等閑視されるべきではない。ラベルとしての「民族」は、国境という人工的な範疇同様、為政者や研究者がまなざす当事者自身の見方とは無縁な次元に開示されていることをそれらは説得力をもって教える。そして名付ける方も、名付けられてきたほうも、さまざまな条件の下でそれを操作し演出するという、「民族」運用の多層性、具体性を明らかにする。

本特集号は内外の博士課程に在学中の大学院生による論考を多く収録している。いずれも、前述の研究会での口頭発表に基づいてとりまとめられたものである。ほとんどが長期にわたる現地調査で得た資料に依拠しており、インフォーマティブで緻密な記述がなされている。対象領域が東南アジアから外れていても、比較分析の上で貴重な事例研究も納めている。さらに、民族境界をめぐる仏教儀礼の双方向性、国境の民族誌への理論的素描、自文化形成をめぐる地域間関係の視点、民族アイデンティティの脱構築など、今後さらに精緻に体系化されてゆくであろう重要な視点や提言もなされている。国境を挟んだ地域間開発が進められてゆく東南アジア大陸部で、民族・国家・地域間関係が織りなす世界の現在を考察する上で、さらには急速に変貌する周縁世界の行方を読み解く上で、いずれも本号に多大なる貢献をなしている。

また、『東南アジア研究』では異色ともいえるべきふたつの作品を納めた。巻末におかれているが、ともに本号の主題に関連する原点、出発点というべき位置を占める。他の大方の論考が同地域における民族社会の動態を具体的なフィールドで収集された資料に根ざしつつ、傾向としては人類学的なディスコース、ないし東南アジア地域研究の枠組のなかで分析検討しようとするのにたいして、対照をなす二論考は、一方が東南アジアに身をおきつつも超越論的視点をとる点、他方が東南アジアを越えて「民族」にたいする形式論的アプローチをとった議論を展開する点で他の論考から区別される。昨今のわが国における人類学的研究では例外的ともいえる北ビルマでの長期従軍記者経験（1985～88年）をもつ吉田敏浩は同地域での現状を伝える得難い資料を呈示するばかりではなく、国家や国境、民族の虚構性をフィールドの「生の哲学」の視点から伝える。民族学者の手にならない一級の民族誌的記述として、東南アジア大陸部の民族と国家間関係の基本的問題群を示している。他方の福島真人は、民族という概念を取り扱う際の一般的処方、すなわち理論的な留意事項について提言している。これは、前述の研究会が発足する前の京都大学東南アジア研究センターで開催された特別研究会（1995年1月「東南アジア大陸部における民族間関係のなかの『民族』と『社会』の動態」）で報告された発表にもとづく論考である。架空のプログラムとして地域事象を描くことにより、民族間関係という現象を議論する際の理論的出発点を示そうとしたものである。この研究会が本特集号にいたる船出となった。ちょうど三年が経過しようとして編まれる本特集号に、当初の貢献をなした福

島論文を欠かすことはできなかった。

特定の地域空間に生きる人びとを対象とすることは、表象としての民族を、社会学的に相対化することである。逆説的なようであるが、常に実体化されたものとして観察者に届く「民族」を対象としつつも、それを解体してゆく作業に携わることである。すなわち、実体視されるものを編制する諸力とその過程を明らかにすることである。それは、さまざまな党派的立場にもとづいて一枚岩的に語られる「地域」をも新たな光のもとにおくような視座を供給する。そのような作業を重ねて、今日大きく変容する東南アジア大陸部という地域が複数のまなざしと関係のもとでいかに動態的に生成されているかを知る手がかりを得ることができる。具体的な経験空間である「地域」を離れた人間の研究は存在しない。また、人びとの生きざまや生活世界にたいする洞察に満ちた個別の民族誌ないし社会誌を欠いては、重層的な様相をもつ地域もまた捉えられえない。それが本号全体のミニマムな主張である。他方で、民族や地域という単位をもはや問題視させないような大きな力がわれわれの日常生活に浸透し、かつ東南アジアを越える世界を覆っている。近代は、循環の摂理を教える自然よりもシステムへの盲従という時代をつくってきた。さればこそ、本特集号は古くて新しい試みである。広く大方の叱正を願うものである。

最後に、本特集号の編集にあたり、各論ごとの地名、民族名称にかんする現地語の邦語表記あるいは翻字表記の原則は、統一されていないこととお断りしておきたい。

文 献

- Barth, F. 1969. Introduction. In *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, edited by F. Barth, pp.9-38. Boston: Little, Brown and Company.
- 林 行夫 (編). 1996. 『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』(文部省重点領域研究成果報告書26). 京都大学東南アジア研究センター.
- 岩田慶治. 1964. 「北部タイにおける村落社会の解体と再編成過程」『東南アジア研究』2(2):2-29.
- _____. 1966a. 「東南アジアにおける山地民族の問題」『人間・人類学的研究——今西錦司博士還暦記念論文集』川喜多二郎; 梅棹忠夫; 上山春平 (編), 357-389ページ所収. 中央公論社.
- _____. 1966b (1991). 『日本文化のふるさと——東南アジア稲作民族を訪ねて』角川書店.
- _____. 1971. 『東南アジアの少数民族』日本放送出版協会.
- 飯島 茂. 1971. 『カレン族の社会・文化変容』創文社.
- Keyes, Charles F. 1979. The Dialectics of Ethnic Changes. In Keyes ed. [1979:4-30].
- _____. 1987. Tribal Peoples and the Nation-State in Mainland Southeast Asia. In *Southeast Asian Tribal Groups and Ethnic Minorities*, edited by Cultural Survival Inc., pp.19-26. Cambridge: Cultural Survival, Inc.
- _____. ed. 1979. *Ethnic Adaptation and Identity: The Karen on the Thai Frontier with Burma*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
- Kunstadter, Peter, ed. 1967. *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations*, 2vols. Princeton: Princeton University Press.
- Leach, Edmund R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: London School of Economics and Political Science. (エドモンド・リーチ. 1987. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫 (訳) 弘文堂.)

- Moerman, Michael. 1965. Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who Are the Lue? *American Anthropologist* 67:1215-1230.
- . 1968. Being Lue: Uses and Abuses of Ethnic Identification. In *Essays on the Problem of Tribes*, edited by June Helm, pp.153-159. Seattle: American Ethnological Society.
- 大林太良（編）. 1984. 『東南アジアの民族と歴史』山川出版社.
- Russell, Susan D., ed. 1989. *Ritual, Power and Economy: Upland-Lowland Contrasts in Mainland Southeast Asia*. Northern Illinois University.
- 内堀基光. 1989. 「民族学メモランダム」『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』田辺繁治（編）, 27-43ページ所収. 東京：同文館.
- Wijeyewardene, Gehan, ed. 1990. *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

【付表】研究活動

1995年度

第1回研究会（95.10.7-8／於広島市）

- 「無文字社会の『歴史』と『社会』へのアプローチ——ミャオ(Miao)族／モン(Hmong)族の調査から」
谷口裕久（京都文教大学）
- 「中国史の中の苗族——『苗』をめぐる諸言説」武内房司（学習院大学）
- 「コンバウン朝前期の『民族』の認識」渡辺佳成（岡山大学）

第2回研究会（95.12.26-27／於岐阜市）

- 「ミエン・ヤオ族の移住とエスニシティ」吉野晃（東京学芸大学）
- 「南タイの村落における実践宗教——ケークレ（ムスリム）とタイ（仏教徒）」西井凉子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

第3回研究会（96.3.3／於京都市／坪内班との合同研究会主題『東南アジアの民族と複合性』）

- 「北タイ・カレン族における『民族』と『文化』の再考——仏教化の事例から」速水洋子（東北大学）
- 「『シャン文化』と地域性」高谷紀夫（広島大学）
- 「スーラーにおける民族形成と地域システム」床呂侑哉（東京大学）
- 「“Glovalization”——地域性と民族複合性の形成論理」山下晋司（東京大学）

第4回研究会（96.3.4／於京都市）

- 「民謡によって表現される『地域』——民謡研究の相対化をめざして」川村清志（京都大学）
- 「貴州ミャオ族の民族文化と『現代化』——国民統合とエスニシティの在り方をめぐって」曾士才（法政大学）

第5回研究会（96.3.16／於大阪市）

- 「パガン朝時代のビルマの仏教」田中和子（大阪外国語大学）

1996年度

第6回研究会（96.4.19／於京都市）

- 「雲南における民族間関係と生態系」劉剛（雲南民族学院民族研究所）

第7回研究会（96.7.12／於京都市）

- 「東北タイの治療師モーラム・ピーファー——天上霊信仰とその継承」加藤真理子（コンケン大学）
- 「ベトナム中部高原少数民族と周辺地域」中田友子（民博総研大）
- 「守護霊祭祀と『歴史』の記憶——中国徳宏地区タイ・マオの事例から」長谷川清（岐阜教育大学）
- 「総合討論」

第8回研究会（96.12.20／於京都市）

- 「北タイ・シャン社会における民族間関係と宗教」村上忠良（筑波大学）
- 「ビルマ辺境における多民族社会の動態」吉田敏浩(Asia Press International)

第9回研究会（97.1.25／於京都市）

「商人としてのアカ族——国境を越えたネットワーク」豊田三佳（ハル大学）

「リスがみたリス——タイ北部リス族のフォーク・エスノロジー」綾部真雄（東京都立大学）

第10回研究会（97.3.28-29／於博多市）

「雲南省徳宏ダイ族にかんする調査報告」長谷千代子（九州大学）

「エスニックシンボルの創成と対応——西南中国トン族の事例」兼重 努（京都大学）

「山地民と林業政策——ビルマ・バゴー山地のカレンと『森林村』制度」谷裕可子（筑波大学）

「タイ族研究の展望」馬場雄司（同朋大学）

「総括と展望」林 行夫（京都大学東南アジア研究センター）

なお、研究会の流れをくむ会合として、1996年3月3日に東南アジア学フォーラム「タイ系社会における『自文化』の現在」が行われている。林行夫と馬場雄司がそれぞれ「ラオ人社会にみる『自文化』の構築——担い手とその周辺」「タイ・ルー社会にとっての国家と移住——地域の歴史的想像力をめぐって」を発表した（『東南アジア学フォーラム・FORUM 通信』17号，京都大学東南アジア研究センター）。

Inter-ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia

Introduction

HAYASHI Yukio*

This special issue comprising 13 articles is mainly related to the dynamics of inter-ethnic relations in the making of mainland Southeast Asia in recent decades, focusing on the Tai-speaking peoples and their neighbors across national boundaries: the Shan in Myanmar and Northern Thailand; the Tai Lue in Northern Thailand and Xishuangbanna, southwestern China; the Lao in Northeast Thailand and Lao P.D.R.; the Karen in Myanmar and Thailand; the Mien in China and Thailand; the Lisu in Thailand and China; the Akha, who have moved to the towns in Thailand; and the Kachin, who struggle for survival on the borders of Myanmar, Thailand and China.

The dynamics of formation and transformation of each group in the face of nation-state building, which draws national boundaries over their life-worlds, and of the recent development of inter-regional relations in the area, is described in detail based on firsthand data obtained from long-term field surveys conducted mainly in the 1980s and the 1990s. Sharing the notion that ethnicity is not fixed and bounded but mobile and relative, and recognizing that the socio-historical formation of the region, conditioned by political power and the modes of cultural expression, has drastically changed in the new environment, the authors discuss various themes observed in fields that are mostly peripheral to the nation-state: the recent development of inter-regional relations across national borders; the duality of Buddhist ritual on the national border; the invention of ethnic symbols; the fluidity of ethnic identity in the process of migration; multiplicity of ethnicity between the majority and minority groups; the presentation of self-culture in the context of tourism; gender and ethnicity in changing village community; and so forth. Others concentrate on the relationship between the natural environment and the peoples who have been peripheralized in the nation-building and on the theoretical problem in analyzing the mode of ethnic construction.

The descriptions are concerned with the process of socio-cultural change including the de-institutionalization of ethnic label and its usage observed in each group of the region and at the same time seek new paradigms to interpret the transnational network of relations which will re-configure mainland Southeast Asia in the age of globalization.

Key word: ethnicity, inter-ethnic relation, mainland Southeast Asia

* Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University